

台湾文化の発源地・大稲埕を訪ねる その1

片倉 佳史

台北の歴史を訪ね歩く中で、大稲埕（だいとうてい）地区は萬華と並んで、双璧とも言うべき重要なエリアである。ここは台北という都市の発展を自らに刻み込んだ土地であり、街の歩みを常に眺めている歴史の証人でもある。今回は台北市の西部、淡水河に沿った大稲埕地区の歴史を紹介してみたい。

台北盆地で港町の風情に触れる

台北市の西部。淡水河に沿ったこのエリアは「大稲埕」と呼ばれている。その由来は、台湾へ渡ってきた開拓者たちが水田の中に空き地を作り、ここで刈り取った稲穂を干したことにちなむ。この大きな空き地を「大稲埕」と呼んだため、この地名が付いた。

現在は住宅で埋め尽くされており、ここに水田があったことなど、全く想像ができないが、地名はそういった時代の様子を雄弁に語る。周知のように、台湾に暮らす大半の住民は中国大陸南部から渡ってきた漢人系住民の子孫である。もともと、台北盆地には福建出身者でも泉州出身者が土地を管理していたという。これが当時の艋舺（後の萬華）の集落を形成する。

これに続いてやってきた漳州出身者は、ここに入ることができなかったため、淡水河下流に位置する大稲埕に居を構えた。当時、この一帯は湿地が多く、決して住みやすい土地ではなかったようだが、後に土砂の堆積によって艋舺が港湾機能を失うと、台北の繁栄は大稲埕に移っていく。そして、淡水河の水運の拠点もこちらに移っていった。

もちろん、土砂の堆積はその後も続いたため、昭和時代を迎える頃には、大稲埕も積み出し港としての機能は失われた。しかし、それと入れ替わるように、陸上交通が発達し、引き続き、物資輸送の拠点となっていた。台北の繁栄はやはりこの

地が中心だったと言っていていいだろう。



大稲埕地区の様子。土砂の堆積で港湾機能を失っていたが、2004年からは淡水河の川下りフェリーが登場した。行楽客に人気がある。



日本統治時代に撮影された淡水河の河畔の様子。名実ともに交易都市・台北の中核だった。

旅人から高い人気を誇る迪化街

清国統治時代の末期、台湾北部の主要産業の一つに茶業の名が挙げられていた。台湾北西部の台

地を利用し、茶葉栽培は一大産業となっていたのである。摘まれた茶葉は、台北に運び込まれて製茶される。そして、淡水河を利用して積み出されていった。当時はすでに土砂の堆積で萬華は港湾機能が低下しており、大稻埕と呼ばれる地区に繁栄が移っていた。その繁栄は全島経済の中心とも言われたという。

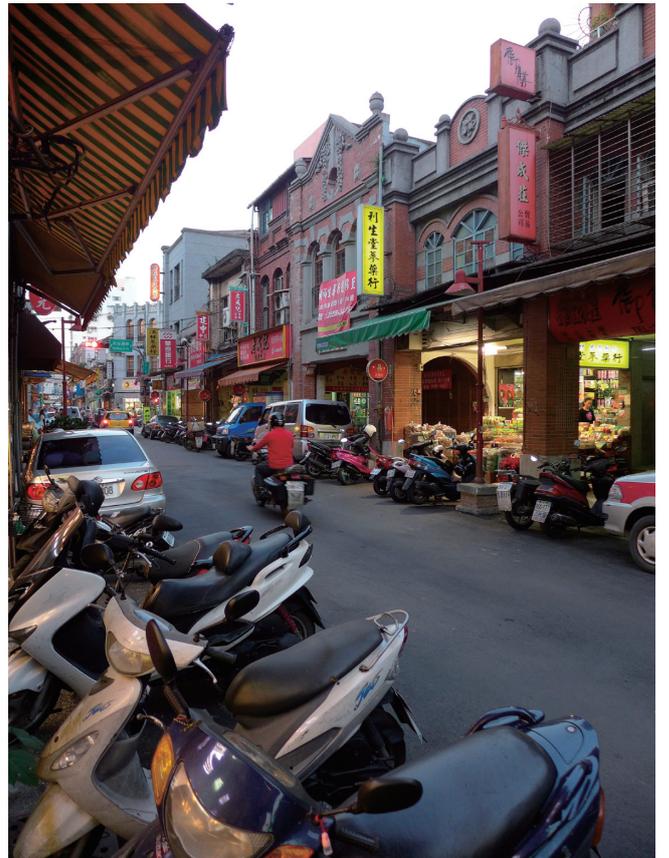
現在、大稻埕の繁華は過去のものとなっている。このエリアで茶葉を扱う業者は今やほとんどなく、産業構造の変化もあって、往年の姿は想像もできない。しかし、迪化街と呼ばれているエリアには古い建物が残っており、往時の面影が色濃く感じられる。現在は食材や乾物、漢方薬などを扱う市場として知られており、庶民の台所として機能している。特に歳末の買い出しの時期には動くのも不自由なほどの人出となる。

最近では観光客も訪れるようになっており、日本人旅行者を見かけることも多い。台湾を訪れる旅行者はリピーターの比率が高く、半数以上が複数回、台湾を訪れたことのある旅人だという。こういった庶民情緒に触れられる空間は深い文化をのぞいてみたいと願う旅人を強く惹きつけている。ここ迪化街の人気は年々、確実に高まっている。

迪化街の家並みを眺めると、一見して古い建物が並んでいる。これらはいずれも間口は狭いものの、倉庫を兼ねており、奥行きがある。特に茶葉を取り扱う商館が多く、製茶工場と搬出業者も多かった。中には、イギリスやアメリカの貿易商社もあり、その繁栄ぶりがうかがい知れたという。

茶業に湧いた台湾経済

大稻埕地区の歴史を語る前に、台湾茶業の歩みについて触れておきたい。今や台湾茶の人気は説明を必要としないだろう。特に烏龍茶は台湾茶を代表する存在で、台湾茶と聞けば、烏龍茶を思い浮かべるほどである。しかしながら、その歴史について紹介される機会は多くない。



迪化街の様子。この一帯の商館は間屋を兼ねていることが多い。散策が楽しいエリアである。



毎年、旧正月を迎える頃には地元の買い出し客で賑わう。身動きも取れないほどの人出となる。

台湾における茶業の歴史は古いものではない。その理由は明確で、この島に住んでいた人々に喫茶の習慣がなかったからである。16世紀、中国大陸から台湾に渡ってきた漢人系住民たちも、喫茶を楽しむ余裕はなかった。文献をひもとくと、清国統治下にあった1830年頃には対大陸の交易品の中に、茶葉の名が確認できるが、本格的な発展



台湾では昭和時代に流行したというバロック風の商店建築群。建築巡りも楽しみの一つだ。

のきっかけとなったのは、1860年に淡水に港が開かれた後のことである。

1857年、アロー戦争後に清国が欧米列強と結んだ天津条約によって、淡水は安平とともに対外国貿易港として開かれた。しかし、これはすぐには批准されず、1860年に北京条約にて開港した。これによって淡水は基隆とともに北部台湾の門戸として発展をみる。英国領事館も設けられ、ここは現在、紅毛城と呼ばれる史跡になっている。

1861年に台湾へやってきた英国人外交官は、報告書の中で、淡水港で商人たちが台北の「ヴァンカ（後の萬華）」で茶葉を購入し、それを廈門（アモイ）へ送り、中国産の上質茶葉に混ぜて輸出していることを指摘している。同時に、台湾産茶葉は悪いものではなく、福建産を上回っているという記述も見られる。

この報告を受け、当時は樟脳に関する事業の視察に主軸を置いていた英国商社は台湾産の茶葉に注目するようになった。台湾北部の土壌や自然生態が詳しく調査され、一帯が茶葉栽培に適していることがわかると、商社主導で茶葉が始められた。

まずは福建の安溪という土地から茶苗が輸入された。この茶葉はもともと最良のものだったと言われるが、台湾の風土にも合い、本場をしのぐほどの評判を得ていく。そして、1867年にはアメリカ大陸に持ち込まれ、特に、ニューヨークで好評を博した。これが台湾の茶葉が注目される最初の

瞬間となる。

1895(明治28)年、日本による台湾統治が始まった頃、台湾茶はすでに国際的な知名度を誇る特産品となっていた。年中温暖で、豊富な雨量は茶樹の栽培条件として申し分なかった。



大稲埕で行なわれていた製茶の様子。従事していたのは女性が圧倒的に多かった。日本統治時代の古写真より。



通 町 平 太 市 北 臺

大稲埕の黄金期は茶葉によってもたらされた。1866年にアメリカ商人のドットによって製茶場が設けられた。「フォルモサ・ウーロン」の名で烏龍茶が好評を博した。1896年の統計では250あまりの茶業業者が集まっていたという。

台湾における茶葉の生産

清国統治時代、台湾北部には一面の森林地帯が広がっていたという。しかし、樟脳の精製による乱伐により、19世紀後半には見る影もなくなっていた。これは樹木を伐採した後、空いた土地を利用して茶樹を植えていたからである。

樟脳はクスノキの株から作るため、根元に近い

部分から切り出してしまう。そして、無計画な伐採を続け、植林をしなかったことが理由として挙げられる。クスノキに限らず、森林資源は枯渇し、短期間で収穫が上げられ、換金性の高い茶樹が植えられていったのである。

現在、台湾茶の産地となっているのは、南投県や嘉義県といった中南部と、阿里山や梨山をはじめとする高山地域である。だが、清国統治時代後期から日本統治時代にかけて、茶葉の栽培地となっていたのは台湾北部であった。この一帯は砂礫層で水の利が悪く、水田耕作には適さない。中国大陸から渡ってきた漢人系住民たちも新竹に入った後、台北盆地を目指していることからその状況が推測できる。

しかしながら、風通しがよく、湿度も安定している桃園台地は茶葉栽培に適していた。現在、高山茶の産地として知られる阿里山や梨山などは、戦後に茶葉栽培が始まった土地で、日本統治時代の茶葉栽培は新竹州が中心で、それに次いで台北州が知られていた。中部以南で、茶葉が栽培されるようになったのは、日本統治時代中期を待たなければならない。しかも、その生産の主体は紅茶の生産だった。



台湾北部の茶畑の様子。茶葉は清国統治時代の台湾経済を支える重要な産業だった。

大稻埕と台湾茶業

清国統治時代後期に大きく発展した台湾茶業だ

が、一時期は台湾北部から輸出される物資の9割方を占めていたという。その拠点となった大稻埕には茶葉を扱う国際商社が20社以上集まっていたとされ、日本統治時代も台湾総督府の奨励もあって、製茶業は年々盛んになっていった。

ここで興味深いのは、当時、茶葉は台湾内での消費がほとんどなかったことである。具体的には烏龍茶はアメリカへ、包種茶は南洋市場に輸出されることが多かった。そして、台湾茶は特産品として珍重されたものの、発酵度の低い茶葉は保存面での課題が多く、味覚的な問題もあって欧米での普及には限界があった。そのため、紅茶の生産が検討されるようになっていく。

台湾総督府と国内最大手の三井合名会社はそれぞれが紅茶栽培の研究を始めた。その後、二大産地とされたインドとセイロン（スリランカ）の茶葉に劣らないものが生産されるようになったが、紅茶は製茶に手間がかかり、施設も大がかりなものになる。そのため、新規参入が難しく、既存業者も総督府の資金的援助が必要であった。その結果、製茶業は三井の独占状態となっていく。製糖産業と同様、宗主国の企業だけが肥える典型的な植民地経済となっていた。

余談ながら、台湾紅茶は順調に成長し、世界的に名が知られるようになっていく。中でも「東方美人茶」と称された白毫烏龍茶は英国で高い評価を受けることとなった。この誉れは今も受け継がれている。台湾中部の日月潭付近ではアッサム茶と同品質の紅茶が栽培されたが、これは戦後に衰退していたものの、ここ数年で再び注目を集めている。

日本統治時代における茶業は外貨獲得という一面が重視されていた。特に紅茶はその大半が輸出に回っており、台湾総督府を大きく潤した。大稻埕にも諸外国から様々なものが流入し、華やかな文化を誇るようになる。後述する洋館建築をはじめ、瀟洒な雰囲気をもったエリアとして注目さ

れていた。

ただし、茶葉は嗜好品であることから、景気の変動には弱かった。全世界的に茶葉市場が不況に見舞われた1930年頃は、台湾の茶業界も苦境を体験している。この時期には優良品種の開発をすすめ、後にさらなる発展を実現したことも注目したい。現在、台湾各地に茶業改良場という機関があるが、その多くは日本統治時代に設けられたものである。生産だけでなく、茶葉の研究においても、日本は高いレベルを誇っていた。

なお、大稻埕で扱われていた包種茶は比較的新しい品種であり、苗木は福建から持ち込まれた。製茶に際し、くちなしやジャスミン、蔓茉莉などを香りとして加えたものである。この花付けの作業は台湾では大稻埕でのみ行なわれていた。

包種茶の多くはシンガポールをはじめとする東南アジア方面に輸出されたが、注目したいのは、包種茶を輸入販売する業者には華僑が多かったことである。これは各地の華僑のネットワークを頼っていたからで、搬出は台湾から行なわれることは少なく、一度、福建省や広東省、香港へ運ばれてから再搬出されていた。特にアモイ（厦門）はその拠点として大きく栄えた。

こういった背景もあり、日華事変によって貿易業につく華僑が取引を停止すると、台湾茶業界も大打撃を受けるが、今度は、中国産の茶葉輸入ができなくなった満州国においての需要が高まり、包種茶は新市場をここに見いだすことになった。昭和14年末の統計では全輸出額の60%を満州国が占めている。

大稻埕を歩く

大稻埕は台北の歴史を語り続ける土地であり、その歩みを体現している地区である。清国統治時代、台北盆地で最初に拓かれたのは萬華や対岸の新莊（しんそう）だったが、ここは後に淡水河の水運を担う河港都市として繁栄を見た。

もともと、この港は淡水港の一部として設けられたもので、規模は大きくなかったが、19世紀後半に入ると、茶葉を中心とした産物の輸出基地となっていく。また、鉄道駅も当初は河岸に設けられており、大稻埕の南端部に位置していたため、物資の積み込み作業で賑わった。

なお、鉄道駅と淡水河で挟まれた地域は泉町（いずみちょう）と呼ばれ、鉄道員の官舎が数多く並んでいた。鉄道線を境目とし、南側に内地人（日本本土出身者とその子孫）、北側には「本島人」と呼ばれた漢人系住民が暮らしていた。

城内や西門町は内地人居住者が多く、特に城内は官庁建築が集まっていたが、こちらは一貫して本島人の街であり、台湾文化の中心として戦後も機能していく。さらに、高度自治を求める社会運動の拠点にもなった。「台湾文化協会」や「台湾民衆党」などはここで誕生している。



大稻埕には外国企業や商館が数多く集まっていた。ここは台湾で最初に海外と接触した土地であり、国際色も豊かだった。太平町の様子。

迪化街で古きよき時代の香りに触れる

迪化街は大稻埕の中核とされていた地域を貫く道路である。長さにして800メートルほどだが、淡水河の交易で賑わったこの界隈には古い商館が並び、いずれも正面にバロック風の装飾が据え付けられている。人々は路地を南街、中街、中北街と分けて呼んでいたが、その関係もあって、迪化

街を「南北貨」と呼ぶこともある（「貨」とは物資・雑貨を意味している）。

迪化街という呼称は1947年に中華民国政府が付けたもので、新疆省（当時）の「迪化」という都市名にちなんでいる。これは現在の中華人民共和国新疆ウイグル自治区のウルムチのことで、清国の乾隆帝の時代に「啓迪教化」という言葉から命名され、中華民国に受け継がれた。啓迪教化とは辺境に暮らす未開の人々を教化・啓蒙するという意味である。

迪化街一帯の歴史は19世紀中葉に、萬華地区で起こった小競り合いで敗北を喫した福建の同安出身者がこの地に逃げ込み、霞海城隍廟を設けたことに始まるとされる。その後、ジャンク船による交易が始まり、河港都市としての発展が始まる。

日本統治時代に入ると、この地域は永楽町と呼ばれるようになり、迪化街の旧名も永楽町通りである。南街を中心に布を扱う業者が集まるようになったのも日本統治時代に入ってからで、現在も数多くの店舗が見られるほか、永楽市場にも生地を扱う業者と仕立て屋が集まっている。

このエリアの特色として、内地人と呼ばれた本土出身者とその子孫は少なかったことを挙げなければならない。これは住民の大半が本島人と呼ばれた漢人系住民で占められていたことを意味する。歴史的にも、日本統治時代を迎える前から発達しており、日本による統治が始まった時点ですでに街並みが形成されていた。

つまりこのエリアは台湾人自身によって作られた文化や伝統が守られ、独自の発展をみたエリアなのである。これは戦後も続き、中華民国体制に組み込まれた後も、外省人勢力に翻弄されることなく、独自の歩みを進めてきた。こういった背景もあり、このエリアに暮らす人々の愛郷心と誇りは他地域には見られない強さがある。

また、建築物についても個性が豊かで興味が尽きない。日本統治時代、行政の中核となっていた

城内には西洋建築が数多く見られ、萬華には日干し煉瓦を用いた伝統建築が多かったが、大稻埕地区は華南地方に由来する商館建築が数多く見られた。

しかも、1920年代以降、西洋風のデザインを取り込んだ折衷様式が発展し、それぞれが個性を競った。これらはいずれも倉庫と住居、そして店舗を兼ねており、奥に長い間取りだった。そして、正面のファサードに欧風の装飾を掲げているのも特色とされた。

さらに、台湾式アーケード「亭仔脚」にも注目したい。台湾では各家屋の玄関前に「亭仔脚」と呼ばれるアーケードを設けることが多い。これは台湾独自とも言える街屋空間で、「騎樓」とも呼ばれる。もともとは華南地方や華僑の移住先となった東南アジアで見られたものだが、台湾でも定着している。日本統治時代には市街地における家屋の新築時にこの亭仔脚を義務づけていたため、どこに行っても目にできるものとなった。

迪化街の場合、軒先が通路となって何軒にもわたって続いている。これは風雨を気にせず歩けるほか、強い日差しや暑さをしのぐこともできる。戦時下においては、外側に厚めの黒い布をかけ、灯火管制下においても商行為が行なわれていたという風聞もある。

なお、大稻埕は萬華と同様、戦時中の空襲から免れている。そのため、戦後も数多くの建築物が残された。現在、迪化街を中心とした一帯にはこういった家屋を訪ねる楽しみがある。独自の商店建築のほか、日本統治時代後期に見られたモダニズム建築も見られ、豊かなバリエーションを誇っている。

茶業豪商の邸宅を訪ねる—陳天来故居

ここはかつての豪商の私邸である。一帯は日本統治時代以前から交易で栄えていた土地で、終戦までは港町（みなとちょう）と呼ばれていた。文



迪化街に見られる建物は住居と倉庫を兼ねており、間口は狭いものの、奥行きは深い。正面にバロック風の装飾を施した飾りがあり、いずれも草木をモチーフにしている。



亭仔脚は中国大陸の華南地区や東南アジアの華僑居住エリアでもよく見られる。

字通り、淡水河の水運を背景とした商業エリアであった。

陳天来は1891年に「錦記」という名の貿易商を開き、台湾茶を南洋市場へ送り出した。特にシンガポール華僑との繋がりが強く、輸出される台湾包種茶の三割方を押さえていたという。また、1927年から1939年まで、10年以上にもわたって台湾茶商公会の会長も務めている。

昭和13年時の商工会議所名簿にも錦記製茶株式会社の記載がある。取締役社長として陳天来の名が記されている。設立は1932(昭和7)年4月となっている。住所は台北市港町3丁目17番地。資本金は50万円となっている。

この会社は後に経営を多角化させ、「蓬萊閣」(酒

楼)、「第一劇場」、「永楽座」などを経営した。なお、「永楽座」は日本統治時代唯一とも言うべき、台湾人を対象とする映画館であった。現在は何の痕跡も残っていないが、台湾史をたどっていく上では見のがせない存在である。

この建物は細い路地に面している。この路地は現在、貴徳街と呼ばれている。日本統治時代は港町と呼ばれていたこの一帯だが、現在は土砂の堆積で大稲埕の港湾機能はなくなっている。すでに往時の繁栄も過ぎ去って、今はむしろ、台北市内の中でもうら寂しい地区に成り果てている。

そんな中、この建物はひととき優雅な雰囲気を保っている。竣工は1923(大正12)年。建物は左右対称のデザインで、美しさが際立っている。2階にはベランダがあり、左右には採光が意識された塔が並ぶ。また、淡水河は氾濫が多く、この一帯も洪水に見舞われることが多かったため、道路よりも玄関が高い位置に設けられていることにも注目したい。

建物は当時、厦門(アモイ)で流行していた華南地方の伝統建築を欧風のスタイルと融合させたものである。現在、路地を挟んで大きなビルが造営された関係で、淡水河を眺めることはできないが、かつては2階と3階から美しい風景が楽しめたという。

この家屋は台北を代表する私邸建築とされ、総督府の要人や皇室関係者の視察なども受けていたという。1階は事務所、2階は接待空間、そして3階が住居となっていた。タイルについてもオランダから持ち込まれたものが使用されていた。そのほか、調度品には陳天来の南洋人脈のためか、インドネシアやマレー半島産の黒檀が多く用いられていたという。

現在も私邸となっているため、館内の様子は伺い知れないが、天井の高い内部は今も高貴な雰囲気に満ちあふれているに違いない。大稲埕、そして台北の歴史が刻み込まれた空間である。



貴徳街は狭い路地だが、両脇にはぎっしりと建物が並んでいる。この写真は向かいに建っている高層マンションの一室から撮影したもの。



淡水河の氾濫を意識し、高床構造となっている。

豪商が開いた教会—李春生紀念教堂

貴徳街一帯は日本統治時代、港町と呼ばれていた。この教会はその中心部に位置している。現在は特に個性が感じられるわけではなく、ごく普通の路地に思えてしまうが、かつては数多くの商館が並び、台湾随一の繁栄を誇っていた。

交易ばかりではなく、外来の文化が台湾に入り込むゲートとしても機能していた。キリスト教の布教も盛んで、数多くの宣教師たちがここから台湾各地へ入っていった。

李春生紀念教堂はそんな港町（みなとちょう）の中心部に位置していた。李春生（1838～1924）は茶商として財を成した豪商である。英国商人のジョン・ドット（JohnDodd）と組んだ彼は台湾茶業の父と言われている。その功績は大きく、1869年にアメリカに向けての茶葉「FormosaTea」の輸出を始め、各地で高い評価を得た。これによって、「Formosa」、そして「Taiwan」の名が世界に知られていくようになった。

教会は大きく改修されており、外壁もタイルに貼り替えられている。しかし、この建物がもつ独特な雰囲気は保たれている。竣工は1937（昭和12）年。正立面の左右に設けられた丸窓が目のように見え、人間の顔のようである。

貴徳街の繁栄は過去の物となってしまった。こ



道幅の狭い路地の交差点に位置する教会。淡水河の水運が活発だった頃の賑わいは過去のものとなっている。しかし、今も数多くの信者が集まり、礼拝が行われている。

の教会もそんな中に眠るように存在している。しかし、今もなお、毎週日曜日の午前10時からミサが行なわれ、多くの信者がここを訪れている。

日本統治時代の派出所が残る

迪化街の北側には日本統治時代に設けられた派出所の建物が残っている。現在は台北市警察局民防義警協勤中心と呼ばれている建物で、終戦までは警察官吏派出所を名乗っていた。迪化街のはずれにあり、喧噪とは無縁な場所にある。建物は大きなものではないが、造りはしっかりとしており、美しく並んだ窓枠が印象的だ。

ここは終戦まで永楽町五丁目交番と呼ばれていた。管轄は大橋町1丁目、港町4丁目、永楽町5丁目の一部とされていた。建物の竣工は1933（昭和8）年。12月28日に落成式が挙行されている。工費は地域住民の寄付によってまかなわれた。

現在は派出所としての機能を終えている。所有者は今も警察で、消防署との共同使用となっているが、人影を見ることはまれだ。今後、この建物がどのような運命を歩んでいくかも不明である。

なお、迪化街は民生東路以南と以北で雰囲気が変わる。商店街となっている南側に対し、北側は民家の比率が高くなり、庶民的な雰囲気が増す。さらに北側に歩いていくと民権西路にでるが、この辺りは廃墟も多くなり、侘びしい印象を否めない。また、涼州街の南側には日本統治時代に建てられた古い建物が残っているが、記録がないため、その詳細を知ることはできない。ここもまた、忘れさられた一角となっている。

榮星幼稚園—旧辜顯榮邸宅

ここは豪商で知られた辜顯榮の邸宅である。現在は幼稚園として使用されている。

辜顯榮は領台当初、日本軍を道案内した人物で、治安が悪化し、混乱を極める台北に日本軍を導いたことで知られる。1934（昭和9）年には台湾人



住宅街の中で独特なたたずまいを誇る派出所。この建物が使用される機会は多くないようで、人影を見ることはほとんどない。ドアも長い間閉ざされたままである。

としては初めての勅撰貴族院議員にもなっている。台湾中部の鹿港出身で、辜家と言えば、台湾人なら知らない人はいないという名家である。

かつて、ここは淡水河のほとりにあり、付近には貿易会社が数多く並んでいたという。現在は環河北路と呼ばれる幹線道路が建物と川の間を横切っており、風情は全く感じられない。それどころか、高い堤防が設けられており、前庭だった場所は駐車場になっているため、川に面していたという印象すら全くない。

この建物は専売品の塩を扱っていたことから、別名「塩館」と呼ばれていた。辜顯榮は台湾統治の功労者として特権を与えられ、財をなした。台湾の歴史を調べていく上では欠かすことができない人物である。

今となっては路地の中にあり、塀も設けられている。建物は何度かの改修を受けており、後方にあった一棟はすでに取り壊されている。しかし、内部は2階が往時の様子を留めており、高い天井と木目の落ち着いた雰囲気が印象的だった。階段も年季の入った木板が使用され、彫刻入りの欄干も健在だ。

なお、ここで使用されていた家具類は、現在、台湾中部の鹿港にある私設民俗文物館に移されている。この文物館も擬洋風の美しい建物で、同じ

く専家が運営している。台湾中部を訪れた際にはぜひ足を運んでほしい博物館である。

この建物が幼稚園として使用されるようになったのは1964年からである。すでに半世紀の歳月が過ぎていることになる。園児たちの元気な声に囲まれて、老建築は今も風格を示し続けている。

台北市警察局大同分局—旧台北北警察署

この建物は日本統治時代、台湾の各地で見られた警察建築の基本スタイルである。これに類似したデザインは、台北以外にも新竹、台中、台南などで見られ、現役の警察署となっている。現地を訪れる機会に恵まれれば、比較を楽しんでみたい。

この建物の竣工は1933（昭和8）年4月のことだった。当時は2階建てで、建坪数は557・8坪とかなりの規模を誇っていた。左右対称のシンメトリーがもてはやされた時代を経て、ここは左右非対称のデザインが採用され、「L」字型となっている。造営を担当したのは台湾総督府官房営繕課。なお、この建物の設計には台湾人建築士が数多く関わっていたことにも注目しておきたい。

一階は警察署となっており、二階には事務所と署長室があった。また、取調室や拘留所、そして水牢などもあり、時代を感じさせる。なお、この建物に使用されている石材は1900（明治33）年に撤去された台北城の城壁の石塊が用いられたことにも注目したい。ここを訪れた際には建物後方に回り込み、石組みの壁を眺めてみよう。

終戦まで、この地域は蓬萊（ほうらい）町と呼ばれていた。この警察署の正式名は「台北北警察署」で、住所は蓬萊町132・133番地となっている。南側には私立静修女学校が並んでいた。

戦後を迎え、何度かの増改築が行なわれている。特に1961年のものは3階部分が増設されるという大工事だった。この工事では、外壁に新しいタイルが貼られてしまい、北投の窯釜で製造されたというスクラッチタイルが見られなくなってし



日本統治時代に各地で見られた典型的な警察建築のスタイル。正面に立ってみると、警察建築らしい威厳が伝わってくる。

まった。

現在は台北市内において唯一残る1930年代竣工の警察署建築となっている。そういったこともあり、1998年3月10日付けで台北市が指定する古蹟となった。現在は警察署としての機能を生かしたままで、公共スペースとなっている（館内は不定期開放）。

建物の前に立ってみると、やはり威厳のようなものが伝わってくる。なお、建物の地下には、かつて使用されたという水牢も残っているという。寧夏路を挟んだ西側には、日本統治時代の警察官宿舎が幾棟か残っていたが、これは数年前に取り壊され、現在は大型ショッピングセンターとなっている。

私立静修高等女学校 現静修女子高級中學

ここは台湾で最初に設けられたカトリック系の女学校である。そして、日本統治時代において、最初に内地人（日本人）と本島人（台湾人）を共学させた場でもあった。日本統治時代の教育制度を調べていく上では、欠かすことのできない存在の教育機関である。

1916（大正5）年4月、カトリック・ドミニク修道院は高等女学校の設立を決め、1917年に生徒募集を開始している。初代校長はクレメンテ・フェルナンデス主教。開校式が行なわれたのは4



戦前の校舎は一部だけが残された状態になっている。古さを感じさせる列柱が存在感を示している。日本統治時代の住所は台北市蓬莱町 167 番地となっていた。

月 16 日だったという。なお、校名は聖女イメルダを記念し、「静心修身」という言葉にちなんだものとされている。

校舎は 2 階建てで、雨天体育場と運動場があった。2 階部の大広間 2 室は寄宿舎として使用されたという。内台共学とは言っても、内地人学生を第一部、本島人学生を第二部として分けていた。また、学外向けに特別科も併設しており、英語やフランス語、スペイン語、絵画、音楽、刺繍などの課目があった。また、全教職員が女性だけになっていたのも特筆されよう。

校舎はスペイン風のコロニアル建築で、竣工時からその優美な姿が注目されていた。戦後を迎え、学生数が増加したため、学校は規模拡大を決めた。校舎も建て替えが決まり、様相は一変して



ここは台湾で最初に設けられた私立女学校である。現在の生徒数は昼間部だけで 2800 名を超えるマンモス校となっている。敷地の北側には台北市北警察署があった。

しまった。しかし、やはりこの建物を惜しむ声はとりわけ大きかったようである。建築母体の一部を残した上で、新造の建物の頂部にモニュメントとしてこれを据えるという手法で、本来の姿を後世に伝える試みを実施された。

構内には戦前の校舎が一棟だけ残っている。すでに増築されており、1 階と 2 階の部分だけが往年の姿をとっている。この建物の竣工は 1927 (昭和 2) 年となっている。列柱には歴史の重みを感じられ、風格が漂っている。

合資会社新芳春茶行

ここは大稻埕地区の茶業史を伝える歴史建築である。交通量の多い民生東路に面し、周囲には高いビルが林立している。その狭間で、静かに存在感を放つ建物である。

昭和 18 年に発行された台北市商工会議所の名簿には、合資会社新芳春茶行として登記されている。住所は台北市日新町 2 丁目 11 番地。会社の代表者は王連河の名が記されている。

もともとは中国の廈門で貿易商を営んでいた人物が、茶葉の交易が盛んになったことを受けて台北に移住。その後、この地を購入している。新芳春茶行の登記は 1935 (昭和 10) 年であるので、竣工もこの時期のものと推測される。

建物は 3 階建てで、道路に面して商店としての

空間があり、二階は応接室と事務所、三階には公媽廳と住居の空間となっていたという。中央三階には小さなベランダが設けられており、優雅な雰囲気を出していた。また、建物の後方には庭もあったという。

外観は洋館風のたたずまいだが、中国南方のスタイルも混ぜ合わせている。正面上部には三角形のペディメントが設けられ、単調になりがちなタイル貼りの表面にアクセントを付けている。また、屋上部には精緻な彫り物が施された欄干柱が整然と並んでいる。

数年前まではこの建物の東側にも、同じく戦前に建てられた建築群が残っていた。いずれもネオ・ルネサンス様式を踏襲しており、整然と並ぶ窓や装飾として設けられた列柱が印象的だった。

この建物は取り壊しの上、高層ビルを建てる計画がたてられていたが、1930年代の商店建築の歴

史性を鑑み、2005年3月17日に台北市から古蹟に指定された。現在、修復工事が進められている。



欧米で好評を博していた包種茶を扱い、製茶工場も兼ねていた。戦後は家主が何度かわり、現在は商店としては使用されていない。正面に掲げられた「新芳春行」の看板の文字も「行」の文字が落ちた状態になっていた（2009年撮影）。

片倉佳史（かたくら よしふみ）

1969年生まれ。早稲田大学教育学部卒業。台湾に残る日本統治時代の遺構を探し歩き、記録している。これまでに手がけた旅行ガイドブックはのべ35冊を数える。そのほか、地理・歴史、原住民族の風俗・文化、グルメなどのジャンルで執筆と撮影を続けているほか、台湾の社会事情や旅行情報などをテーマに講演活動を行なっている。著書に『台湾 鉄道の旅』（JTB キャンプックス）、『台湾に生きている日本』（祥伝社）、『観光コースでない台湾』（高文研）など。台湾でも『台湾風景印-台湾・駅スタンプと風景印の旅』（玉山社）などの著作がある。台北生活情報誌『悠遊台湾・2014』を近刊予定。

ウェブサイト台湾特搜百貨店 <http://katakura.net/>